

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。



下條よしあき

下條よしあきプロフィール
1950年長野県生まれ。1968年、高校卒業後、宮谷一彦のアシスタントになるために上京する。1971年「傷だらけの墓標」（漫画ジャンポ）でデビュー。1974年「花咲町行方不知」で漫画サンデー漫画賞の佳作を授賞。代表作に「雨の朝サブは」（原作・梶原一騎/ブレイコミック）、「マイン刑事」（原作・鷹見吾郎（すがやみつる）/月刊少年チャンピオン）など。近年はゴルフや釣りを題材にしたマンガを多く描いている。



プロになろうという決心のもと
宮谷一彦の元でアシスタントに

最初のマンガ体験ですか？ そのあたりの記憶は、あまりはつきりしないのですが、私が子供だった時代は月刊マンガ誌が全盛でした。「少年」や「冒険王」「日の丸」とか。週刊マンガ誌はすでに出ていたと思うけれど、お金持ちの家の子しか買えなかった。月刊誌なら月に一回だけお金を払えばいいじゃないですか。そうして買ってもらった月刊誌をすごく大事に読んでいましたね。好きだったマンガはたくさんあります。益子かつみさんの「さいころコロ助」とか山根あおおにさんの「でこちん」。もちろん手塚治虫さんやちばてつやさんのマンガにも憧れました。

プロのマンガ家になりたいと思ったのは中学に

入った頃からです。桑田次郎さんや望月三起也さんのマンガをずいぶん真似して描いていました。どちらかというと劇画系のマンガ家さんの絵を模倣していたのですが、そっちの方がかつこいいじゃないですか。こんな絵を描いたんだ、と友だちに見せると、おおすごい、と言われるしね。

そうこうしているうちに思春期に突入したんですけど、手塚さんやちばさんのマンガには性の悩みについてはいつさい描かれていなかったじゃないですか。でもその頃から読み始めた貸本とか「COM」や「ガロ」では性のことを積極的に扱っているので、自分の頭のなかでぐちゃぐちゃしているものが描かれていたというか。だから自分がプロのマンガ家になるとしたら、青年マンガ誌なんだろうなと思うようになりました。

ちなみに僕は長野県で育ったんですけど、周り

に貸本屋がなかったんですよ。そのかわり、町外れの小さな書店では、貸本が買えるような店があったんです。だから高校生のときは、バイトしたお金をコツコツ貯めて、それで貸本を買って読んでいました。

ちなみに高校は工業科だったので、バイクの修理なんかをバイトでやっていました。あとは農機具の修理も得意でした。もちろんバイクは乗るのも大好きで、長野には千曲川が流れているんですが、この川沿いにモトクロスコースがいくつもあり、そこに遊びに行ったりもしていました。

あるとき「COM」を読んでいたら、宮谷二彦さんがバイクの出てくるマンガを描いていたんですね。メカに詳しい自分から見ると、バイクの描写に間違いが多かったので、そこを指摘した手紙を送ったら、宮谷さんから返事をいただき、そこから交流が始



宮谷先生と一緒に COM の取材に行った和歌山の漁港



西新宿にあったマンガ喫茶「コボタン」宮谷一彦の原画展をやっている

まりました。高校を卒業するときに、アシスタントにならないかと誘いを受けたので、二つ返事で上京しました。当時、宮谷さんは「少年サンデー」でプロレーサーの高橋国光さんのマンガの連載が始まったので、バイクに詳しい私が呼ばれたんです。すでに

私は高校のときにはバイク雑誌にイラストを投稿して何回も載っていましたし、本格的なコマ割りのマンガも描いていて、絶対プロになろうと決めていたんです。

宮谷一彦さんって、バイクや音楽のマンガが多かったんです。ですから私がアシスタントに入った後に入ってきたアシスタントは、楽器が弾けてリアルに描ける人だったんです。私もバイクをやっていたので、バイクが傾く角度はこれくらいとか、いろんなことをアドバイスしていました。

それから2年半。宮谷さんの仕事場は三鷹にありましたが、ほんとにタコ部屋みたいなところでアシスタントをしていました。休みは正月の三が日ぐらい。仕事が詰まってくると徹夜続きで、最大で3日間寝ずに描いていたことがあります。とにかく休みなく必死で描くという。でもまあ好きで入ったところだし、そんなにつらくはなかったですけどね。だから1969年から71年ぐらいの宮谷さんの青春マンガのほとんどの背景は私とその音楽に強いアシスタントの二人で描いていました。最近、「ライクアローリングストーン」が復刊されたじゃないですか。あの作品はちょうど私がアシスタントに入った年に連載が始まったんですね。自分が18歳のときに関わったマンガが、いま単行本になるとは思いませんでした。あれを見ると、涙が出てきますね。いろんな思いがよぎります。



ライクアローリングストーン 宮谷一彦・著
2017年8月 フリースタイル・刊



プロデビュー後も続いた
さまざまなマンガ家との交流

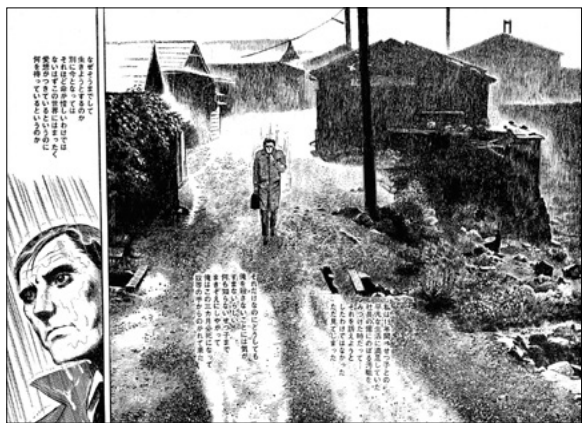
宮谷さんは交友関係の広い人でしたから、上村一夫さんのところに遊びに連れていかれて、つい得上村さんの背景を手伝ったりすることもありましたよ。あとは永島慎二さんのところで麻雀しに行っ

たりしました。高校時代から憧れていたマンガ家さんと普通に話ができるのが嬉しかったというか。私はアシスタントだったし、先生たちの話の聞き役に回ることも多かったんですけれど、永島さんなんか、私が麻雀していて眠くなると、俺の布団で寝ていいよ、と言ってくれたりして。あの頃は徹夜徹夜で大変でしたけれど、自分は幸せだったと思います。

そんな日々を送りながら2年半ぐらい経っていったんですが、もともと私は弱視でだんだん目の前のものに焦点が合わなくなってきた、度の強い眼鏡をかけても駄目。それで宮谷さんの



デビュー当時の作品は、宮谷一彦氏の影響を強くうけていた



方から「お前はもう辞めろ。これ以上続けても無理だから」と言われて、これはもう、自分のペースでマンガを描くしかないと思って、いったん長野に帰りました。しばらく実家について自分のマンガを描いていましたが、21歳のときに日本文華社（現在のぶんか社）に持ち込みをしました。ちょうど青年マンガ誌を創刊するところだったので、連載が決まってデビューが決まったんです。

でも、それだけではなかなか食えません。編集部の人が明治大学の漫研出身で、同じ漫研だったかわぐちかいじさんや、ほんまりうさんのアシスタントをしてくれないかと言われて。それで行ってみたら、かわぐちさんのところも、ほんまさんのところもすごく楽だったんです。宮谷一彦さんみたいに、トーンを二重貼りして、その上から削って、というような緻密な絵ではなくて、筆でササッと描くよ

うな絵柄だったので、とにかく速く描けるんですね。たとえばお昼ぐらいに私を入れて4人ぐらいのアシスタントが集合して、そこから24ページを一日で仕上げるんですね。ほんとにすごいスピードでした。

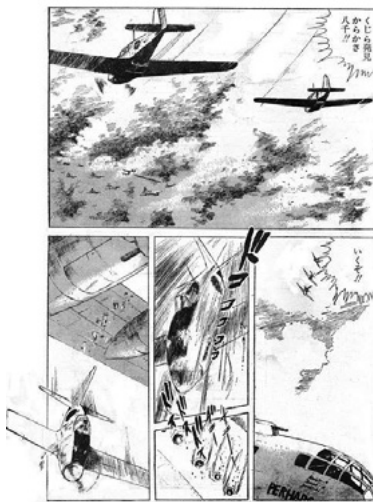
それまでは、私の絵はどうしても宮谷さんのタッチに近い絵を描いていたんですけど、かわぐちさんのところで、一晩で連載一本分を描くと知ってから、がらっと絵柄が変わりました。かわぐちさんにそっくりな絵になっていったんですよ。でも編集の人からは、かわぐちかいじは二人いらなからと言われて、そこからまた絵柄を変えていきました。結局、宮谷さんとかわぐちさんの中間のような絵に落ち着いていきました。

宮谷さんのことを考えると、やっぱり自分とは

かわぐちかいじ氏のアシスタントをやり、強く影響を受ける。



「黙示録の戦士」では、下條氏が締め切りを抱えた中で手伝ったお礼に、かわぐちかいじ氏が背景やメカを手伝ったページがある。



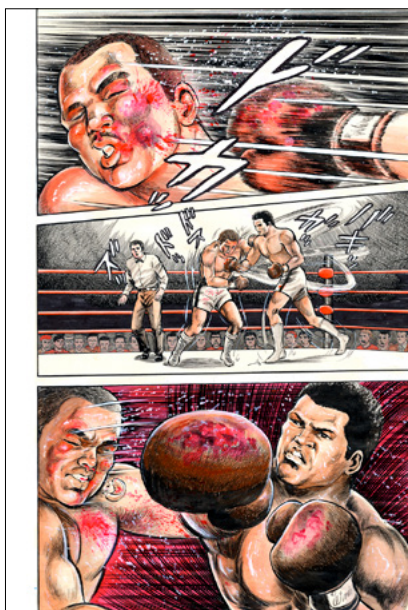
あまりに作家としてのレベルが違いすぎます。天才だし、宮谷さんと同じ世界に行こうとするのはあまりにも辛い。だから精神的な意味で宮谷さんを捨てようと。好きだけど自分とは違うし、ましてや目指すものではない。かわぐちさんや永島慎二さんもそう。みなさん特別な才能を持っていたと思います。



梶原一騎との仕事を経て
自分の得意ジャンルを模索

マンガを最も多く描いた出版社は、秋田書店です。成田清美さんという「プレイコミック」の編集長にずいぶんお世話になりました。「プレイコミック」って、私以外は名だたる作家さんばかりなんですよ。石ノ森章太郎さんとかジョージ秋山さんとか。そんな中で、私みたいな若造に梶原一騎さんの原作をつけてくれたんです。「雨の朝サブは」というタイトルで、28歳の時でした。しかもボクシングマンガ。「あしたのジョー」が終わって10年ぐらいの頃でしたけど、身に余る光栄というか。自分がやっていいのかなと。しかもその成田さんから「当面、巻頭で行くから」と。すごく私のことを買ってくれていて、そういう人がいてくれたことがとても大きかった。

『雨の朝サブは』原作：梶原一騎 劇画：下條よしあき 秋田書店発行 プレイコミック
連載（隔週刊）1979年9月13日号～1981年12月24日号



たですね。

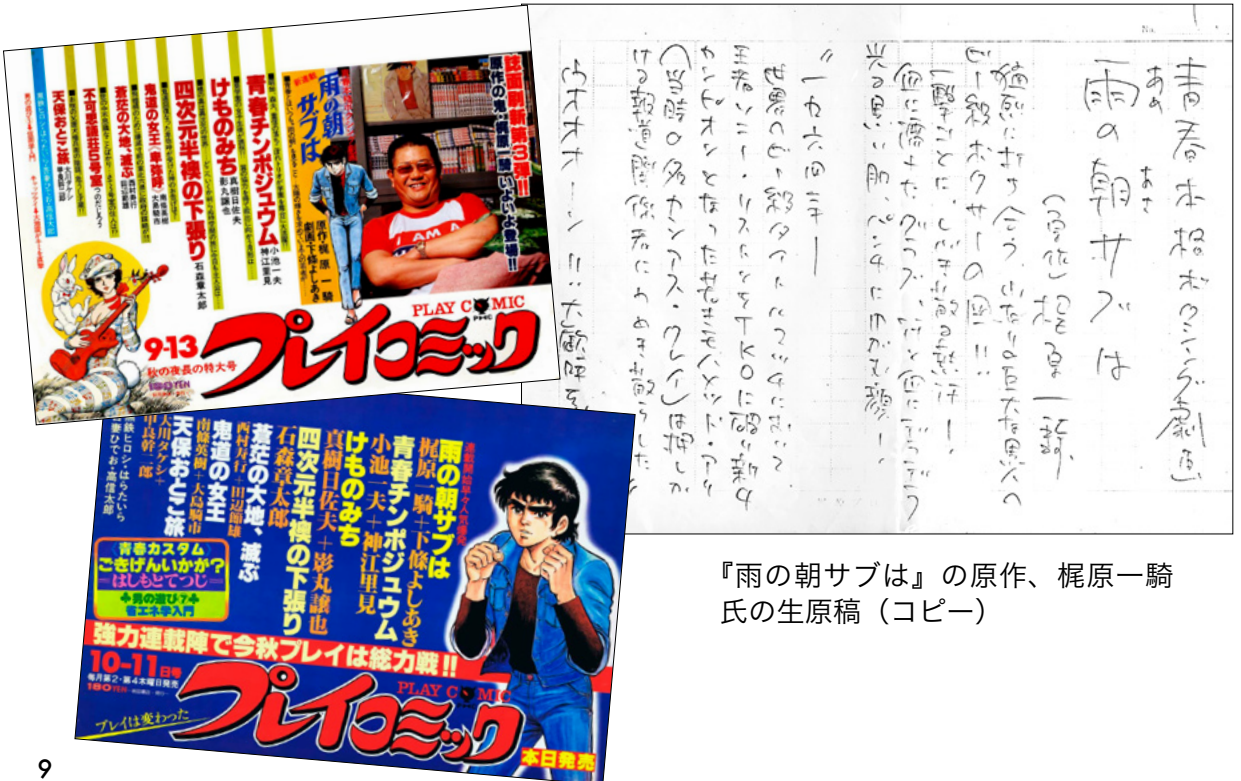
その頃の梶原さんは43歳でした。連載を始めるにあたって、梶原さんのところに挨拶に行かなければいけないじゃないですか。こちらはもう緊張しっぱなしでしたけど、「そんなに緊張していると会話もできないからリラックスしろよ。これから一緒に仕事をしていくんだから」と言っていたら、一緒にボクシングを見ようと、後楽園ホールに連れていってもらったり、本当に良くしていただきました。だから私は梶原さんに対しては良いイメージしか残っていません。

梶原さんの原作は原稿用紙で届きます。一字一句変えてはいけない、という伝説がありますけど、梶原さんからは直接こう言われました。「お前が変えても良くなる。俺の原作には50歳ぐらいの奴が出てくる。そんな奴のセリフを、28歳のお前が変えて良くなるのか。だか

ら変えるな。お前にそこまで人間が分析できるわけないだろう」と。確かに梶原さんと私では人生の重みが違いますから。実際、連載でもトップを取れましたし、それはセリフを一字一句変えずに描いたからだと思います。ちばてつやさんは「あしたのジョー」のセリフを変えたと言われていますが、梶原さんとはほぼ同年齢だし、人間観察のレベルも高かったからできたことだと思います。ちばさんは27歳のときから「あしたのジョー」を描き始めたんです。私もほぼ同じ年齢で梶原さん原作のボクシングマンガが描けるとは。感謝しても仕切れませ

ん。
「雨の朝サブは」の頃から、これからはエンタテイメントの方向を目指さなければいけないと思うようになってきました。それまではやっぱり宮谷二彦さんの影響が大きかったので、描くマンガは劇画調だった

当時の電車の中吊広告『雨の朝サブは』が常に巻頭、トップにきている



『雨の朝サブは』の原作、梶原一騎氏の生原稿（コピー）

たし。ちょうど少年誌の「月刊少年チャンピオン」で「マイコン刑事」を描くことになったので、劇画色は完全に捨てなければいけなかったのもあります。

その後はまた青年誌に戻って、釣りやゴルフのマंगाを描くようになりました。私は釣りもゴルフも好きでしたから、趣味でやっている部分を生かそうかなと思いました。35歳ぐらいになると、そういうスタンスの方が楽なんです。私は画力があるタイプではないし、自分が好きなジャンルじゃないと勝負できないですからね。でも、実は別に釣りもゴルフも得意でも何でもなかったんです。でもゴルフは先に出てきた成田さんが「GOLFコミック」の編集長になったので、彼の誘いでやり始めたら夢中になって、その勢いで10年以上ゴルフマンガを描き続けました。

『マイコン刑事』原作：鷹見吾郎（すがやみつる）・漫画：下條よしあき 月刊少年チャンピオン連載（月刊）1982年2月号～1985年4月号





釣りマンガ雑誌が発行されると、釣りを勉強し、釣りマンガにも挑戦していった。

釣りもほとんどやったことがなかったんですが、私の息子が中学生のときに大きな病気をしたんですね。そのとき、「もし良くなったら好きなもの何でも買ってやる」と言っていたんです。一年ぐらいで息子は完治して、「親父、何でも買ってくれるって言ったよね」と釣り具屋に連れていかれて。そこで、一本5万円ぐらいする釣り竿を何本も買わされて。息子がそんなに釣りが好きだとは知らなかったんですけど、そのときから彼に釣りを教わるようになりました。それが辰巳出版から「つりコミック」が創刊されたときに、どうも私が本格的に釣りをやっていると聞いた編集さんが声を掛けてきて、パスプロの人と一緒に取材に行くことになったんですよ。これはまずい、ということ、息子に「俺が一人前に見えるように特訓してくれ」と頼みまして。釣り竿でルアーを遠く離れた缶のなかに入れる練習を始めました。一日3時間ぐらいやっていたと思

ます。その甲斐あって、バスプロの人と一緒に釣りをしたときに、「あんた、相当やつてるね」と言われたんです。それを聞いた編集さんが、じゃあ連載しよう、と。それが「バスマスター嵐丸」という作品です。

マンガ家は、その時代に需要があるものを見つけていけないと難しい。たとえば野球マンガを描きたいからといって、そればかり延々と描き続けられるのは水島新司さんぐらいしかいませんからね。当時は釣りとゴルフのマンガ誌はたくさん出ていましたし、その時代に描かなければいけないものがあると思います。



マンガを描き続けられる幸せ
会心作は自分で読んでも感動する

私、実は寅さんが好きなんです。ああいう「男が

つらいよ」みたいな人情物のマンガが大好きなので、どれだけ読者を泣かせられるかというのも、自分の分野だと思っています。だからジャンルは釣りでもゴルフでも、最終的には読んだ人を泣かせたい。ある原作者さんが私の描いたマンガを見て電話をかけてきたことがありました。その人が言うには、「ああいうの、俺が書きたかった話なんだ。なんで描くんだよ」と。でも、「すごく良かったよ」と言ってくれたんです。尊敬している原作者だったし、やったーっ！ と思いましたね。

良かったと言えば、現在は知り合いの出版社で編集者をしていて、過去のマンガを電子書籍にする仕事を主にやっているんですが、マンガ家の知り合いが多いので、許諾が取りやすいですね。お前がやっているんならいいよ、と言ってくれるので。あと、私ってすごいマンガ馬鹿じゃないですか。だか

ら、昔憧れていたマンガ家さんに電子書籍をきつかけに会えるのが単純に嬉しいというか。

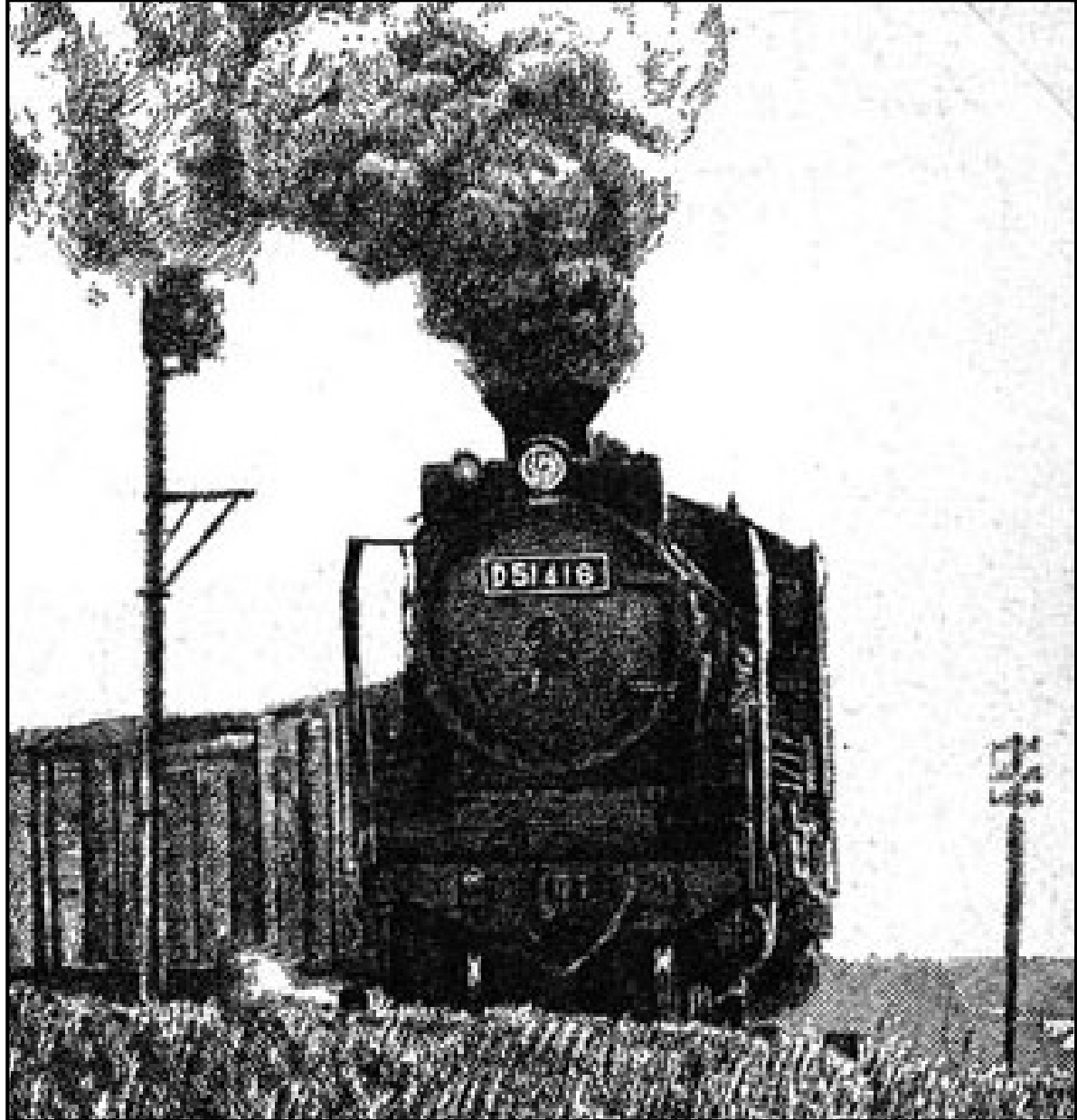
最近は企業や役所向けのマンガを描いたりしています。雑誌ではもう描いていません。あとは去年の夏から同人誌をつくってコミケに出しています。去年描いたのは、私の高校時代です。宮谷一彦さんのところに行くまでの自伝的なマンガを描きました。今描いているのは、アシスタント時代の話です。今年の夏のコミケに出す予定です。今はマンガ業界に関わりながら、なにかしらマンガを描いていられればいいと思っています。キャラクターを動かして、感動的な話が描ければいいなと思うだけです。多くは望みません。

私、自分でいいマンガが描けたと思ったときは、自分のマンガを見て泣いちゃいますから。ストー



自伝的なマンガを描いて、2017年から、コミケにも参加している。

リーはだいたい風呂に入っているときに浮かぶんですよ。血流が良くなるからでしょうかね。いい話が浮かぶと裸のまま風呂から出て、机にすわって書きます。それで、「いまこういうストーリー考えたから聞いてくれ」と女房に話して、また泣くという。そんな、体がジーンとするぐらいの泣かせる話を書けたら、それは自分の世界ではないかと思うんです。



ペン画／下條よしあき

インタビューを終えて

ひとりのマンガ家の目から見た、青年マンガの歴史とでも言うのでしょうか。宮谷一彦さんやかわぐちかいじさんなど、名だたるマンガ家さんとの交流のなかで、模索しながらご自分の描きたいものを確立していかれた過程をいきいきと語っていただき、感謝です。梶原一騎さんとのエピソードはまるでドラマか映画を見ているような気分になりました。

文・中島泰司

2018年6月1日

池袋北口の喫茶店伯爵にて